

里川文化塾

詳細はHPで公開しています。

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/>

里山や里海だけではなく、暮らしとかがわるすべての水循環の経路を私たちのセンターでは「里川」と呼んでいます。いろいろな里川を発見しその価値を身近に感じたい！ ということで、2011年度からスタートした「里川文化塾」。「水の郷・日野を歩く～用水路を活かしたまちづくり～」(11月10日)と「船でゆく荒川～人工水路と暮らしの接点」(12月6日)のご報告です。

第9回里川文化塾 水の郷・日野を歩く～用水路を活かしたまちづくり～

会期：2012年11月10日（土）10：00～17：00

会場：【午前】七生福祉センター／【午後】落川交流センター（ともに東京都日野市）

プログラムリーダー：山畑泰子さん／市川倫也さん ともに編集者

講師：長野浩子さん／石渡雄士さん ともに法政大学エコ地域デザイン研究所研究員

講師：高木秀樹さん 日野市環境共生部緑と清流課水路清流係

ゲスト：土方フミさん 地元生産農家／佐藤美千代さん 市民団体「まちの生ごみ活かし隊」代表

フィールドワークガイド：荒川四郎さん／小松妙子さん

多摩川と浅川の水に恵まれた東京都日野市は、都心から西へ35km。用水路が縦横に巡る豊かな田園と近代的な都市空間が共存する日野市では、市民・研究者・行政が連携しながら、用水路を活かしたまちづくりを進めています。民学官連携によるまちおこしのポイントや、これから都市型農業用水が生き残っていくためのヒントを、フィールドワークと座学で探りました。



第10回里川文化塾 船でゆく荒川～人工水路と暮らしの接点～

会期：2012年12月6日（木）10：00～17：00

会場：amoa（アモア）ホール／国土交通省巡視船「あらかわ号」

プログラムリーダー：山畑泰子さん／市川倫也さん ともに編集者

講師：宮村忠さん 関東学院大学名誉教授、ものづくり大学大学院特別客員教授

ナビゲーター：富田好明さん NPO法人北区地域情報化推進協議会理事

ナビゲーター：鴨川慎さん 国土交通省荒川下流河川事務所地域連携課長

ナビゲーター：太田裕史さん 国土交通省荒川下流河川事務所地域連携係長

岩淵水門（東京都北区）から隅田川と分かれて東京湾に注ぐ荒川放水路は、度重なる東京下町の洪水被害を解消するために1930年（昭和5）に完成した人工河川です。かつて洪水常襲地だった岩淵水門周辺を歩いたあと、荒川知水資料館及び、岩淵水門周辺の施設を見学。全長22kmの荒川放水路を船で往復しながら宮村忠さんのお話をうかがいました。水の脅威と恵みがともにあった地域で、水害や地震への備えや自然環境保全などに荒川放水路が果たしている役割は何か、流域の暮らしといかにかかわっているかについて学びました。



2013年は、以下の里川文化塾を準備中です。詳細はHPでお知らせしています。

4月 5日(金) 「野川を歩く～都市河川を考える～」

5月11日(土) 「演習林で学ぶ『森と水』」

7月21日(日) 「野草探しから草木染め&がさがさ体験」

9月 「大久保長安が築いた八王子の町と水」

10月 「雨水」

11月 「越前和紙と現代の木版画」

■水の文化44号予告

特集「水族館」(仮)

新世代型水族館が大人気。日本人はなぜそんなに水族館が好きなのでしょう。知られざる水族館の実態に迫り、その秘密を探ります。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今年度の企画についても、詳細は順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

編集後記

◆ 山形は食を通じて大好きになった土地。幸せを感じる「食」を体験させていただける今があるのは、多くの先人の方々の努力・継承であること知り、感謝です。歴史的にも意味深い土地であり、「見る・食べる・学ぶ」ために、是非再訪したいものです。(宮)

◆ TPPへの参加表明から、日本の農業の危機が叫ばれているが、独自のブランドを強固にして頑張っている庄内地域のような所もある。ヒトやモノやサービスは移動できても、そのエリアの産物が留まるような支持や共鳴を獲得すること。それがヒントになると思うのだが。(新)

◆ 私の中で「庄内」というと藤澤周平の描く海坂藩。作品群で描かれる人智に長けて真面目で堅実な気質は、現在も脈々と受け継がれているのを感じた。日本の農業に元気がないと叫ばれる現在、その柔軟性で現状を打破する原動力となつてほしい。(松)

◆ 庄内に友人が何人もいます。子供のころから住んでいる友人、お嫁さんの出身地に移り住んだ友人。その誰もが異口同音に庄内の「自然や人柄や農産物や食文化などについて自信たっぷり」に自慢をします。今回その理由が少しわかったように感じます。(ゆ)

◆ 現代の日本では、自分が暮らす土地やその特産物に愛着や誇りを持つことは、実はなかなか難しい。多くの人が、それを持ち続けている庄内は素晴らしいところだと実感した。先人達の苦労が偲ばれる話も多かったが、彼らにとつてもその苦労は「生きがい」であったのだと思う。(原)

◆ 三方を険しい山に囲まれ西は海。交通網が整備された現在でも陸路で庄内に行くのは困難だ。そんな地理条件ではガラパゴス的な発展をしようだが、一味違った気質の庄内人。他にも通用するモノづくりをし、更にトップランナーとなつているところが凄い。(力)

◆ 砂丘沿いの防風林と、道路に沿って延々と吹雪よけフェンスが印象的な庄内の風景。風が強くて苦労が多いだろうと思いつつ、ただ茶豆畑の向こうに目をやると、風力発電の風車がすごい勢いで回っている。庄内で生きる人々の強さを見た気がした。(麻)

◆ 子どものころ、母の三面鏡を覗くと自分の顔がどんどん小さくなりながら続いているのが見えた。今号で種について考えたとき、このときの経験が頭に浮かんだ。今「在る」ことは、DNAが延々と連なることと同義語だ。種を守る大切さを思い起こしたい。(賀)

発行日 2013年(平成25)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
島谷幸宏 九州大学工学研究院教授
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 原田朱野

編集製作 賀川一枝 編集長 小野田麻里 中野公力 賀川啓明 撮影・デザイン

発行 ミツカン水の文化センター
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中壘ビル9F
株式会社ミツカングループ本社
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第43号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写